令和８年

６月の重要農作業

四国中央市農業振興センター
《問い合わせ先》
四国中央農業指導班　TEL 23-2394
（畜産）東予家畜保健衛生所　TEL (0897) 57-9122

【作　物】

１　早期水稲の管理

(1) 中干し：６月上旬頃(出穂35～40日前)から、必要茎数（約18～20本）/株が確保され次第、足跡が軽くつく程度に行います。中干しの目安は約７～10日間で、圃場により土の乾き具合が異なるため、土壌条件に応じて連続または間断での中干しをしてください。

(2) 追肥：根の活力を高めるため、出穂40日前頃にＰＫミックスを20kg/10a施用してください。

２　普通期水稲の管理

(1) 品質向上対策

登熟期（特に９月）に平均気温26～27℃以上の高温になると、腹白粒・乳白粒など白濁した玄米（白未熟粒）が発生して品質が低下します。対策として、田植時期は６月中旬以降として、無理な早植えは避け、株間20㎝以上（45～50株/坪）の植付けとし、日当たり・風通しを良くしてください。

また、にこまるは、田植時期を５月下旬～６月10日頃までとし、あまり遅植えにならないようにしてください。栽植密度は、過度の疎植にした場合、青未熟粒の発生割合が高くなりますので50株/坪程度としてください。

さといも・やまのいも等野菜作付け後ほ場は、基肥量を減らしてください。

(2) 病害虫防除

「サンエース箱粒剤」を１箱当たり50ｇ施用（移植当日）してください。

いもち病、紋枯病、稲こうじ、ウンカ類、イネミズゾウムシ、ツマグロヨコバイ、イネドロオイムシ、イネツトムシ、コブノメイガの総合防除剤です。

(3) 水田雑草防除（除草剤散布）

農　薬　名	使 用 時 期	使用量/10a	使用回数
エンペラージャンボ	移植直後～ノビエ3葉期	25gパック10個	1回
ジェイフレンドフロアブル	移植後5日～ノビエ3葉期	500mℓ	1回
カチボシ１キロ粒剤51	移植時･移植直後～ノビエ2.5葉期	1kg	1回
天空１キロ粒剤	移植時･移植直後～ノビエ3葉期	1kg	1回
ラオウ１キロ粒剤	移植時･移植直後～ノビエ2.5葉期	1kg	1回
エンペラー豆つぶ250	移植直後～ノビエ3葉期	250g	1回

【使用上の注意点】

ア　田面の凹凸が無く均平になるように耕起・代かきし、丁寧に畔塗りして漏水防止に努めましょう。

イ　除草剤散布後３～４日間はそのまま湛水を保ち、田面を露出させないようにしましょう。

ウ　除草剤散布後７日間は落水、かけ流しはしないようにしてください。（田面が露出し、入水が必要な場合はゆるやかに入水しましょう。）

エ　藻類の発生が多い場合は、薬剤の拡散が妨げられるので、ジャンボ・フロアブル・豆つぶ剤は注意しましょう。　＜松本＞

【野　菜】

１　さといも

(1) 疫病対策

・梅雨期の連続降雨に注意して防除を行ってください。

・「平均気温25℃以上の高温と連続降雨」で発病し、被害が拡大します。

・カンパネラ水和剤を予防散布し、初発確認後ダイナモ顆粒水和剤を散布します。

農 薬 名	散布濃度	収穫前日数/回数	使用上の注意
カンパネラ水和剤	1,000倍	収穫７日前まで／２回以内	予防・治療効果がある。高温多湿時薬害を生じるおそれがある。
ダイナモ顆粒水和剤	2,000倍	収穫21日前まで／３回以内	予防および治療効果がある。感染直後でも、病気の蔓延を阻止。連用すると耐性菌が発生しやすい。

注意点：薬害防止のため、防除は灌水後夕方に行う。
降雨直後等の葉が軟弱状態での散布は避ける。
展着剤スカッシュ2,000倍若しくは、まくぴか10,000倍を混用すると薬剤がよく付着し、防除効果が上がる。【倍率を厳守】

(2) 全期マルチ栽培

ア　土入れ（マルチの上に土をのせる）

子芋、孫芋の肥大・子茎の発生促進・品質向上・奥芽芋、たけのこ芋、青芋の発生抑制とマルチ内の地温上昇を軽減するため、５月下旬～６月中旬頃に一輪管理機等でマルチ上に土をのせてください。

イ　害虫防除

ハダニ類の発生時は、コロマイト乳剤1,000倍で防除してください。

(3) マルチ栽培

ア　おおなか(化成体系)

子茎の発生開始期に、おおなか作業を行ってください。目安は５月下旬～６月上旬頃です。

イ　追肥

「ＭＢ粒状固形」を80kg/10a施用してください。

(4) 露地栽培

ア　おおなか(長期緩効性肥料体系又は化成体系)

子茎の発生開始期に、おおなか作業を行ってください。目安は６月中旬～下旬頃です。

イ　追肥

長期緩効性肥料体系は「菌根甘」を40kg/10a又は化成体系は「ＭＢ粒状固形」を80kg/10a施用してください。

(5) 害虫対策

コガネムシ類幼虫対策として、おおなかで「オンコル粒剤５」を９kg/10a施用してください。

ハダニ発生時には薬剤散布(全期マルチ栽培と同様）してください。

＜徳永＞

２　やまのいも

２本以上萌芽している株は、早いうちに１本にします。また、株元に光が当たるように誘引し、蔓がむらなく繁茂するように蔓直しをしてください。

３　排水・乾燥対策

例年、６月中旬頃から梅雨を迎えます。溝に雨水が溜まらないよう、排水を徹底してください。また、梅雨においても晴天、高温が続き土壌が乾燥する場合は、灌水を行ってください。　＜三谷＞

【果　樹】

１　温州みかん

着果量に応じた管理を行い、果実の肥大促進と次年産用結果母枝の確保により、高品質果実の安定生産に努めてください。

(1) 着果量が少ない樹

養分競合による生理落果を抑制するために、着果部周辺の強い新梢の芽欠きや被さり枝の除去を行い、幼果とその周辺の受光環境を向上させてください。粗摘果は中止して、仕上げ摘果や樹上選果で着果量を調整します。

(2) 着果過多の樹

早期の摘果で夏芽の発生を促し、樹勢維持と次年産用結果母枝の確保を図り、隔年結果の防止に努めてください。

・早期（一次落果終了後の６月下旬頃）に樹冠上部1/3を全摘果。

・速やかに夏肥施用（窒素成分量５kg程度/10a）。

・発生した夏芽にはミカンハモグリガの防除。

２　中晩柑類

(1) 摘果

中晩柑類の大玉果生産には、肥大が旺盛な生育初期の摘果が効果的なことから、着果が多い樹から摘果を開始します。

着果が多い樹は、一次落果終了後から摘果を始め、粗摘果は概ね60葉に１果残す程度とし、葉数が５～７枚の有葉果を主体に着果させます。また、不知火は、７月上旬までに全摘果量の８割程度を目標に摘果します。

(2) 施肥（夏肥）、灌水

新梢の充実、幼果の肥大促進と樹勢維持を図るために、夏肥を施用します。

(伊予柑・甘平・不知火等は６月下旬に窒素成分９kg/10a、愛媛果試第28号は６月上旬に窒素成分10kg/10a)

土壌が乾燥する場合は、灌水を実施し、肥料の吸収を促してください。

３　病害虫防除

かいよう病と黒点病の感染に注意し、薬剤散布を徹底してください。

カイガラムシ、カミキリムシ、ハダニ・サビダニも防除してください。

○かいよう病：６月下旬～７月上旬。ICボルドー66Ｄ200倍。（高温時散布は薬害を生じることがある。夏季マシン油散布14日前までに散布）

○黒　点　病：落弁後の第１回散布後、200～250㎜の累積降雨または30日以内に２回目散布。ペンコゼブ水和剤600倍。　＜三谷＞

【花き・花木】

１　アネモネ、ラナンキュラスの掘上げ

掘上げ適期は摘花のピークから40～50日後、葉が黄化し始めた頃です。

若掘りは発芽率低下の要因となります。掘上げ後は、日陰で十分乾燥させた後、手でもみ込み、根と土を除きます。

また、乾燥機を使用する場合は、28～30℃で約40時間を基準とし、必ず一日に数回混ぜるようにします。

２　シキミ

(1) 炭そ病

葉の縁から褐色の不定形病斑が形成され、激発するとほとんど落葉します。５～８月に発生が多くなります。発病した茎葉は早めに取り除いてください。

(2) シキミグンバイ

体長は４～５㎜程度で、葉裏に寄生して吸汁加害します。被害葉は表面が白いカスリ状になる他、葉裏に糞や脱皮殻が付着し外観を損ねます。４～10月まで繁殖を繰り返し、再発もしやすいため、発生圃場では初回防除から７～10日後の再防除が効果的です。葉裏によくかかるように散布してください。

(3) フシダニ類

体長は0.15～0.2㎜程度で、葉に寄生して吸汁加害します。被害葉にはモザイク状の輪紋が発生し外観を損ねる他、葉の黄化や奇形葉を誘発します。

(4) 防除薬剤

６月下旬～７月上旬に、定期防除として殺菌剤のベンレート水和剤2,000倍、殺虫剤のオルトラン水和剤1,000倍、ダニ剤のピラニカＥW1,000倍を混用散布してください。

ミツバチの巣箱の近くや、茶園や他の作物を隣接して栽培している場合は、農薬の飛散に十分注意してください。　＜浜田＞

【畜　産】

梅雨の季節を迎え、湿気と暑熱両面への対策が重要な時期となりました。特に近年は猛暑日が増えていますので、暑熱対策の早めの備えにより、家畜の生産性低下を予防しましょう。

暑熱対策の基本は、人の熱中症対策と同様に、①環境温度を下げること、②脱水症状防止のための水分補給を行うこと、③飼料摂取を促進すること、の３つが重要なポイントです。

(畜舎内環境の管理)

寒冷紗やよしずの設置により、直射日光（特に西日）を遮断しましょう。換気扇の清掃、動作確認、消耗部品の点検を行い、夏場の故障を回避しましょう。また、畜舎内に家畜の糞尿を放置すると、アンモニアなどのガスが発生するだけでなく、その発酵熱で畜舎内の温度が上昇し、人および家畜に悪影響を及ぼします。畜舎内の除糞や換気をこまめに行いましょう。

(給水ニップル等、給水設備の確認)

猛暑時にはより多量の給水が必要となるため、この時期から給水ニップルや給水カップの破損、詰まり等の点検を行ってください。与える水は長時間溜め置かず、新鮮な水の補給に努めましょう。

(飼槽の管理)

夏場は食べ残した飼料が短期間で変敗するため、飼料残さはこまめに取り除き、少量を複数回に分けて給与したり、涼しい時間帯に給与したりするなど、家畜に必要な量の飼料を新鮮な状態で与えることが重要です。　＜真鍋＞